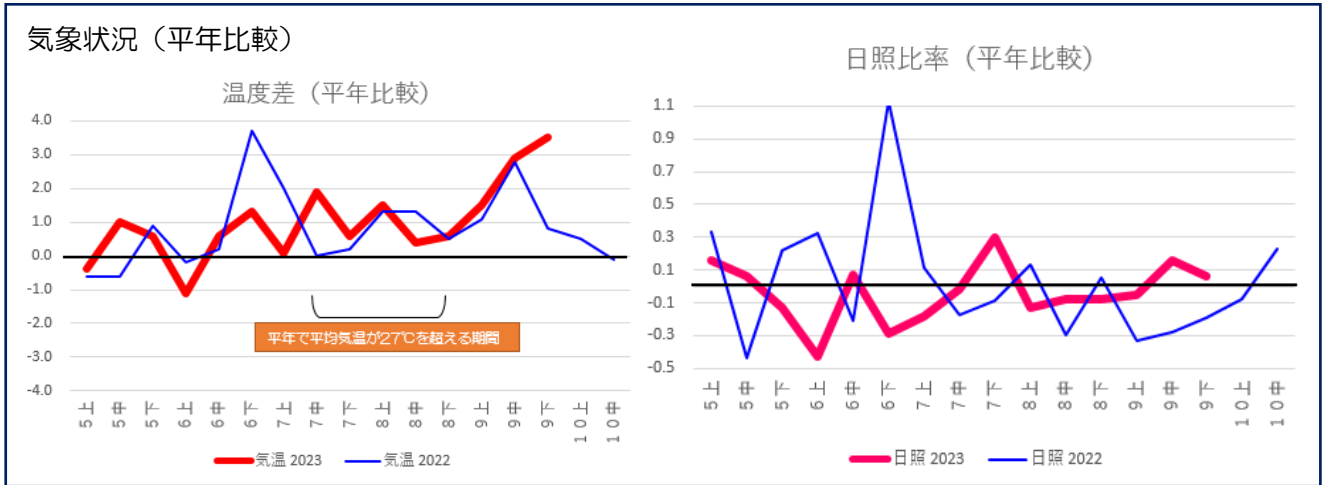


ひめの凜栽培技術情報

1 気象情報について



コメント

気温は、平年より9月中旬は2.9℃高く、9月下旬は3.5℃高く推移している。
 日照は、平年より9月中旬は2割多く、9月下旬は1割程度多く推移している。
 ※気温が平年(23.6℃)より高く、日照が平年(40.6hr)より多い状況であり、最高気温の平均が30℃を超えているため高温対策が必要。

2 栽培管理について

生育状況

- 5月上～下旬田植は、出穂はやや遅かったが、登熟はやや進んでいる状況で、収穫はやや早まる傾向であり、**刈り遅れに注意すること!**
- 6月上旬田植は、9月上旬に出穂を迎え、収穫は10月上旬の予想。
- 6月中旬以降田植は、9月上旬に出穂し、収穫は10月上中旬の予想。
 ※気温が高く、日照はやや多く、収穫適期はやや早まる傾向になる。
 ※本年は、葉色がやや薄く草丈もやや低く推移している。

適正な水管理

- 今後も、気温が高い状況が予想されており、日中かけ流しや夜間入水を可能な限り実施する。
- 湛水状態は、根痛みを生じさせるので、飽水管理での間断灌水を行い細やかな水管理を心がける。
- 台風などによる強風が予想される場合は深水湛水とし、通過後は直ちに一旦落水する。

落水の目安

- 落水は、収穫作業に支障がない限りできるだけ遅らせ（収穫の5日前）、根や葉の活力を収穫直前まで維持させる。

3 病害虫について

いもち病の発生状況

- 中予における、発生は地域差がみられるが平年並の状況。一部で穂いもちの発生有り。
- 今後の気象予報によると気温は高く、降水量は平年並のため、発生は、現在の傾向が継続する。

紋枯病の発生状況

- 県病害虫発生予察情報では、やや多の予報となっている。
- ほ場によっては、株元～中位に発生が認められており、今後の気象予報によると気温は高く、降水量は平年並とされており、上位進展しているほ場では坪枯状の症状が見られる。

トビロウカの発生状況

- 県病害虫発生予察情報では、並～やや少の予報となっている。
- 後の気象予報によると気温は高いため発生には助長的であるが、現在のところ発生密度は低い。

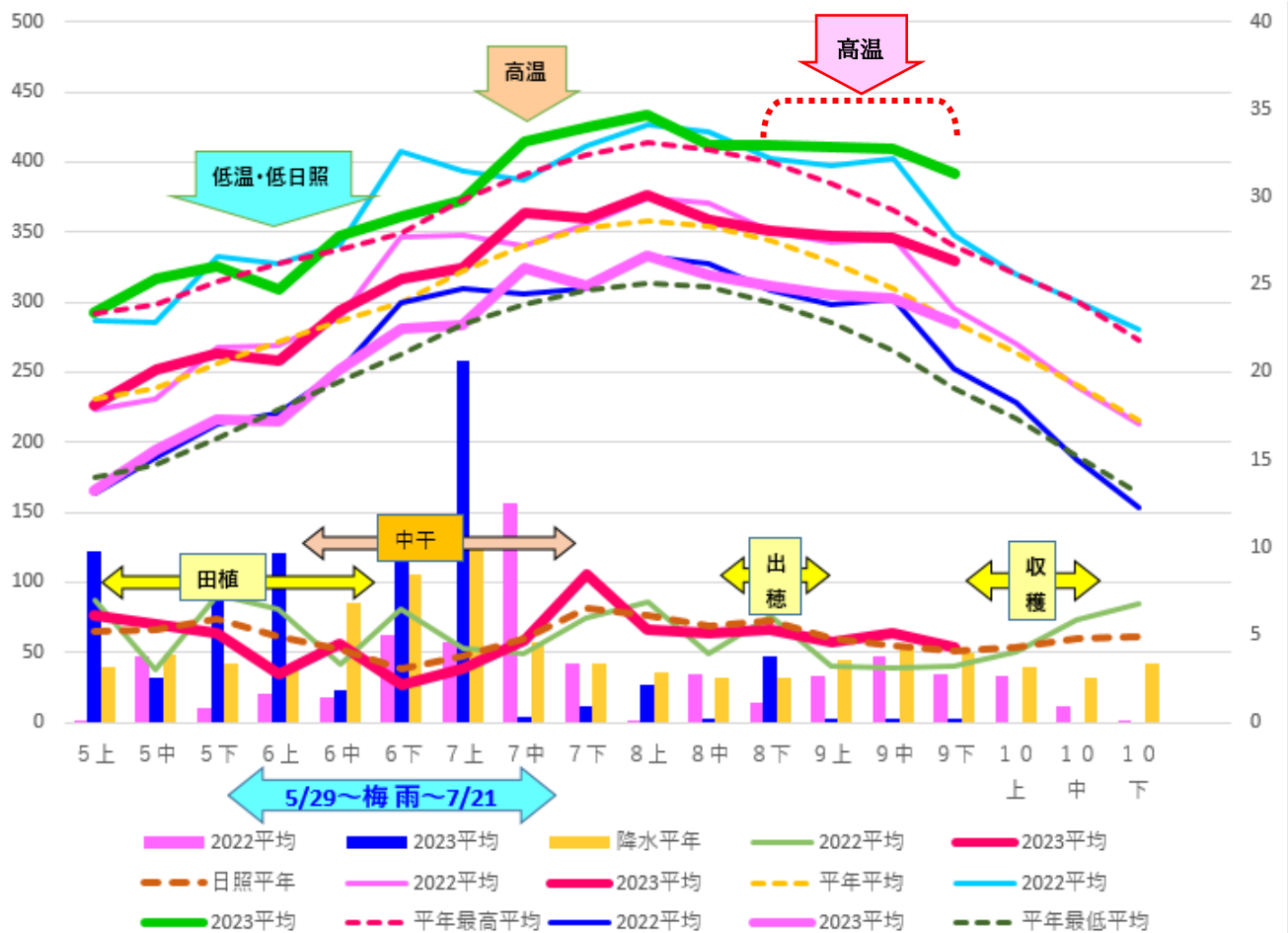
斑点米カメムシ類

- 県病害虫発生予察情報では、並～やや多の予報となっている。

稲こうじ病

- 中山間地域を中心に発生が見られている。調整作業を丁寧に行い、混入を避ける。

気象状況（松山）



高温対策

飽水管理を徹底するとともに地域の用水の供給状況に応じ、適切に水管理（かけ流し・湛水など）を実施できるように準備を進めておく。

フェーン現象対策 【参考】

フェーン現象に備えて、深水管理に！（5cm以上）

※急激な高温により脱水状態になり、白穂や胴割粒を助長。
 ※深水は水分補給だけでなく風揺れを低減。

○ 出穂期前後は最も水を必要とする時期。

→ 出穂時に土壤水分が維持されるよう水管理を徹底。

★ フェーン情報や台風情報等に注意し、湛水できるよう準備。

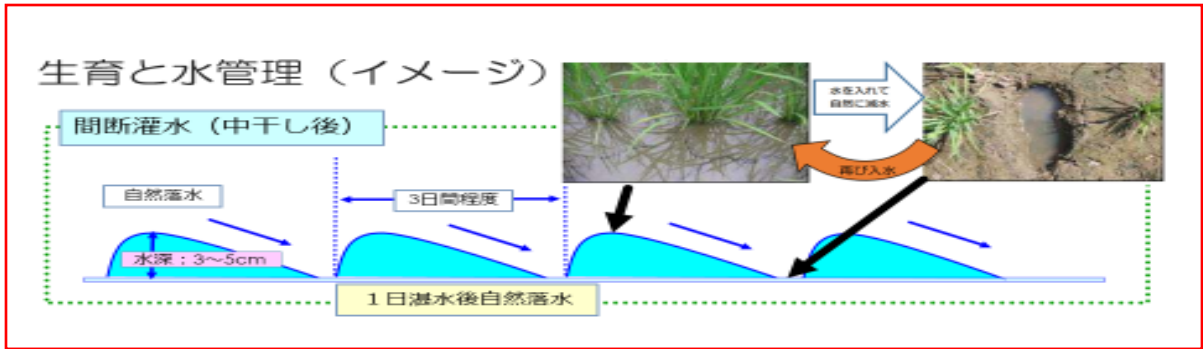
※ 出穂期 30日後までは飽水管理を徹底。

→ 可能な限り遅くまで土壤水分を保持のこと。

× 常時湛水や表面の土が白く乾くまで干さない。

★ 台風情報等に注意し、強風・フェーン現象等による高温・乾燥が予想される場合には、品質と収量の低下（白穂、白未熟粒、胴割れ）を軽減するため、早めの湛水に努めること。

★ フェーン現象や強風の日には終日深水管理とし、収まったら直ちに落水。



気象予報（1か月）

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高い

期間の前半は気温がかなり高くなる見込み。降水量は平年並、日照時間は平年並。

1か月の平均気温・降水量・日照時間

	平均気温（1か月）	降水量（1か月）	日照時間（1か月）
四国地方	低10 並30 高60% 高い見込み	少30 並40 多30% ほぼ平年並の見込み	少30 並40 多30% ほぼ平年並の見込み
数値は予想される出現確率（%）です	<p>平均気温（1か月）</p>	<p>降水量（1か月）</p>	<p>日照時間（1か月）</p>

週別の平均気温と天候

	平均気温（1週目） 09/30～10/06	平均気温（2週目） 10/07～10/13	平均気温（3～4週目） 10/14～10/27
週別の天候	天気は数日の周期で変わりますが、高気圧に覆われやすいため、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。	天気は数日の周期で変わりますが、前線や湿った空気の影響で、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。	天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
四国地方	低10 並10 高80% 高い見込み	低20 並50 高30% 平年並の見込み	低20 並40 高40% 平年並が高い見込み
数値は予想される出現確率（%）です	<p>平均気温（1週目）</p>	<p>平均気温（2週目）</p>	<p>平均気温（3～4週目）</p>

管理について（参考）

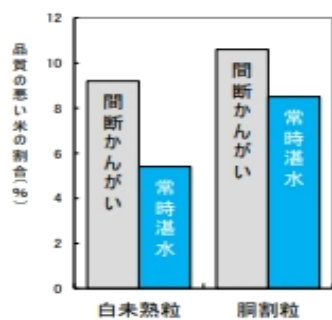


図1 出穂前後の水管理と白未熟粒、胴割粒との関係
(滋賀農機扶セ 2006年「コシヒカリ」)

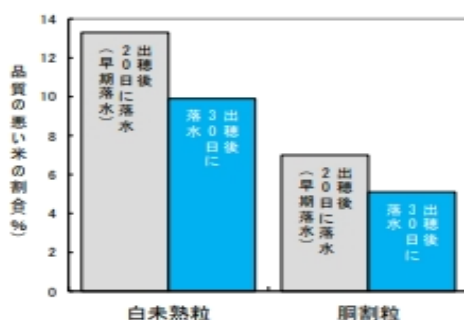
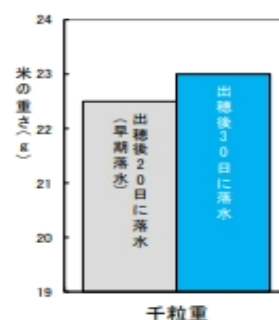


図2 落水時期と白未熟粒、胴割粒、千粒重(米の重さ)の関係
(滋賀農試湖北分場2004年「コシヒカリ」)



出穂前後の常時湛水で
白未熟粒、胴割粒が減ります

収穫直前まで入水すると、白未熟粒、
胴割粒が減り、収量も増加します

※玄米の発達について

玄米の発達は出穂開花後 25 日以降まで続きます。出穂期 25 日後までは飽水管理を継続することによって、土壌に適度な水分を保つことで窒素の発現を促して後期栄養を維持するとともに、白未熟粒の発生を抑えて整粒歩合を高めることができます。

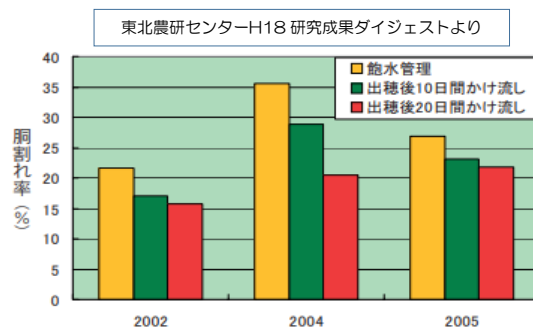
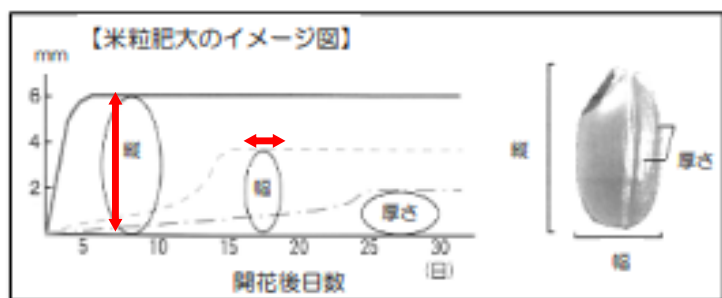


図3 登熟初期の水管理条件が胴割れ発生程度に及ぼす影響
(品種:あきたこまち)

図3のように、登熟初期にかけ流しの灌水を行うと胴割率が低くなる。

特に、出穂 10 日間の地温を下げることで軽減効果を高める。

適期収穫について

○記録的な高温のため、今年の登熟は早くなる見込み。

- ・ 9月以降も昨年と同様に高温条件が継続している。

○圃場ごとに、黄変率が 85%程度になった時期に収穫を開始。

- ・ 積算気温を目安に籾の黄化状況を確認する。

○収穫開始は、平年より2～3日程度早めになると予想されるので、刈遅れに注意。

- ・ 刈り遅れは、胴割れや基部未熟粒の増加につながる。

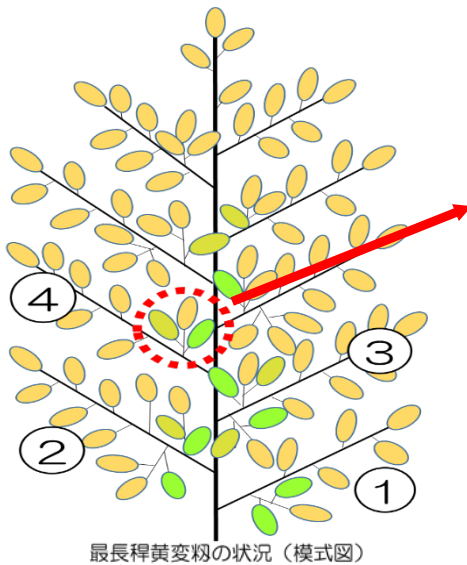
(適期の目安)

積算温度：930～1000℃

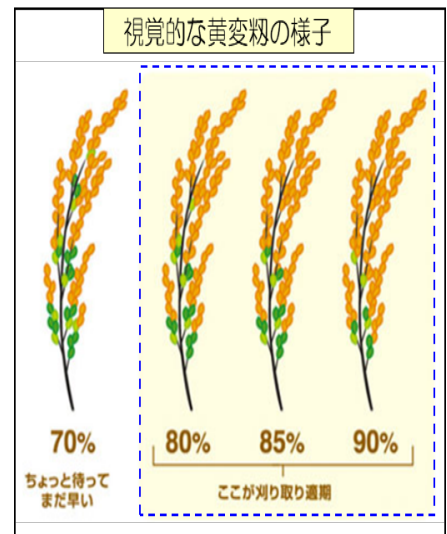
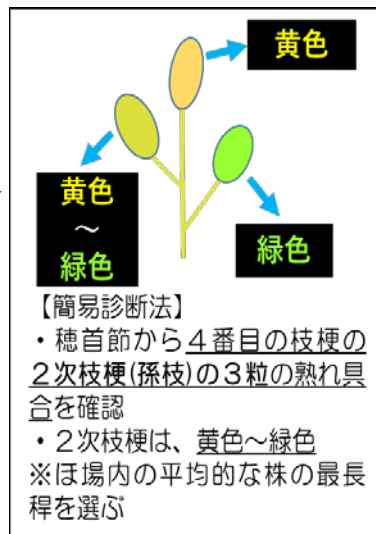
黄変率：85%

出穂日数：37～43日

収穫時水分：25%



最長稈黄変率の状況（模式図）



適正な乾燥

○収穫後の生粃はできるだけ早く乾燥機に張込み、通風する。

○胴割粒の発生対策

- ・乾燥機の送風温度が高いほど品質・食味が低下する。

◎適正な温度管理の目安

初期水分 24%で 50℃以下、初期水分 28%で 40℃以下

※毎時乾燥速度が 0.8%を超えると胴割粒が多くなるので注意する。

※胴割れが懸念される場合は、毎時乾燥速度を 0.5%以下にする。

- ・台風（フェーン等）に遭遇した場合、軽微な胴割れが生じやすくなるため、通常より低めの温度でゆっくりと乾燥させる。

※日中の加温は避け、通風により水分ムラを解消し、気温の下がる夜間から点火し、通常より低温で乾燥させる。

適正な調製

○米選機のふるい目は 1.85mm以上を使用し、適正な流量で、くず米等を完全に除去する。

○被害粒が多い場合は、必要に応じて色彩選別機を活用する。

来年に向けて稲わらの秋すき込みの実施

○収穫後できる限り早く（10月下旬～11月上旬頃まで）すき込みを行い、分解を促す。

○すき込みの深さは、5～10 cm程とし、稲わらと土壌をほど良く混和させる。

○粃殻はケイ酸質が豊富な資源のため、粃殻散布後に稲わらをすき込むことで、土づくり効果が高まる。